講　演　録

歴史を学ぶということと憲法9条

小和田　哲男

静岡大学教授・文学博士

竜爪山九条の会　発会記念講演　2007年2月11日

静岡市葵区・瀬名公民館において

目　次

はじめに　2
『功名が辻』時代考証・『風林火山』裏話　2
１　小さな歴史から大きな歴史へ　大きな歴史から小さな歴史へ　3
歴史とは何か　3
小さな歴史と大きな歴史　3
風土記の編纂と六国史の編纂　4
秀次事件　5
風土記の流れ　近世の地誌　近現代の県史・市町村史　6
官撰地誌と民間の研究　7
２　瀬名・千代田・古庄の歴史　8
文献上にはじめて出てくる瀬名　8
瀬名氏・堀越氏　8
今川氏・中村氏・大久保氏　9
家康ゆかりの伝説地　幕ヶ谷・水梨　10
梶原景時　10
瀬名川と瀬無川　11
千代田・古庄　11
谷田（やとだ）と漁業　12
３　歴史を学ぶとはどういうことか　13
歴史を学ぶ面白さ　13
歴史から生き方の指針をつかむ　15
変革を恐れない魂を培う　16
４　歴史を学ぶことでみえてくる「憲法９条」の重要性　17
戦争と歴史認識　18
悲惨な戦争体験が日本の「平和」を支えている　18
「憲法９条」を守る運動と歴史の担い手　19
質問と小和田先生のお答え・五井代表の発言　19
小和田先生のプロフィール　23

はじめに

ただいまご紹介いただきました小和田です。今の導入部の所にも書いておりますけれども、私、生まれは静岡市なんですが、そこには静岡市としか書いてないんですけれども、実は上土(あげつち)なんですよね。で、さっきそこで売店のところで、私の従兄弟と、ばったり会いまして、この会場に来てるんで、そういう地縁もございまして今回、九条の会・竜爪山九条の会、発会ということで、記念講演させて頂きたいと思います。

『功名が辻』時代考証・『風林火山』裏話

今、司会者の方からご紹介をしていただきましたように、昨年の一年間『功名が辻』の時代考証を務めてきました。多くの方に見ていただきまして、ここ数年の中では比較的視聴率も良かった番組と言うことで、ＮＨＫの方も喜んでおりましたけれども。

まあ虚実取り混ぜてというとあれなんですけれども、今だから話せるって部分も多少なきにしもあらずです。あれをそのまま史実と受け取られちゃうと、ちょっと困ったなという部分もあったりしましたけれども、とりあえず、あまりはずれないというか、間違えがないという方向では、やってきたつもりです。

今年はご承知の通り『風林火山』で、時代考証をやっている方は、これ私の大学・大学院の２年先輩の方で、武田研究の第一人者なんですけれども、柴辻俊六さんが務めてます。ここ、そうですね２・３回、私もずーっと始めから見ていますけれども。雪斎(せっさい)が出てきたりね、寿桂尼(じゅけいに)が出てきたり、庵原(いはら)氏が出てきたりと、この駿河というか今川ゆかりの人物がたくさん出てきておりますが、実はあれ原作にはないんです、あの部分は。ＮＨＫがそれこそ、先ほど言いました柴辻さんを通して、私の方にいろいろ今度は質問がきたりしていて、どういう関係で描いたらいいのかということで、一応アドバイスしておりまして、だから、それはそう大きな間違いがないとは思うんですけれども、その先原作にこんど沿ってゆくと結構、嘘と言っちゃあ、あれですけれども、創作部分も多くなるんで、ちょっと注意が必要かなとは思いますが。

いずれにしても私が専門としている歴史で、今日は、「歴史を学ぶということと憲法９条」という、大きなテーマと言いましょうか、タイトルで、お話をさせていただきたいと思います。

１　小さな歴史から大きな歴史へ　大きな歴史から小さな歴史へ

歴史とは何か

皆さんのお手元に簡単なレジュメが行っていると思うんですけれども。限られた１時間という時間ですので、あまり脱線しない程度にお話をしていきたいと思います。

皆さん多くの方がご承知な事とは思うんですけれども、そもそも「歴史ってのはいったいなんなのか」という事で、よく質問を受けるんですけれども、言葉としては、それこそ「歴」と「史」ですよね。あの日本語に漢字で歴史っていうのは、歴と史という二つの文字からなるわけですけれども。この「歴」というのは言うまでもなく、経歴であるとか、履歴であるとかいうことの「歴」でして、これようするに、かつて起こった事、あった事、過去の事ということになります。「史（し）」というのは何かというと、これはまあよく古代の書記の人のことを「史（ふひと）」、同じ字を書いてね、史といって、ようするに記録のことなんです。ですから、歴史ということは、過去に起こった出来事の記録。ということは、過去に起こった出来事でも、記録として何も残らなければ歴史ではない、というかたちになります。ですから、歴史じゃない「歴」もたくさんあるというところをですね、まあ、ご認識といいましょうか、承知しておいて頂きたいと思うんですけれども。

小さな歴史と大きな歴史

その歴史を描くときに、レジュメにもちょっと書きましたけれども、小さな歴史と大きな歴史という見方を、よく私どもするんです。小さな歴史というのはそれこそ、もちろん自分の歴史、よく最近、自分史という言い方でね、言って、そういう本も書かれる方も多いんですけれども、まぁもちろん自分史あるいは家族史、あるいは一族史、そういったのは比較的小さい歴史です。

で、それに対して少しずつ大きくなってくると、その地域の歴史。地域というか例えば村の歴史、あるいは村がいくつか集まって今回のこの竜爪山の会のように、昔でいう何ヶ村かがですね、集まったそういう地域の歴史。さらにはその少し上へいって、郡の規模の歴史、あるいは県の歴史、そして最終的にはこの東海地方の歴史だとか、日本の歴史。あるいはさらにはもっと広がって、アジアの歴史、世界の歴史というかたちで、どんどんどんどん小さい歴史から大きい歴史というふうなかたちでいくわけです。

風土記の編纂と六国史の編纂

が、その小さな歴史と大きな歴史、どのようなバランスというか、捉え方できているかといいますと、やっぱりレジュメにも書いておきましたように、「風土記」とそれから「六国史（りっこくし）」という大きな流れがございます。

「風土記」がどちらかというと比較的小さな歴史の部類に入ります。古代律令国家が編纂した「風土記」として、これはよく高校、日本史なんかではやっておりますし、それから入試問題にもよく出るんですけれども、現存するのはどこか、とかね、今なくなっているけども有名なのはどの「風土記」かとか。ようするに『出雲国風土記（いずものくにふどき）』とか『常陸国風土記（ひたちのくにふどき）』とか、そういう、かく国ごとに編纂した地方の「風土記」があるわけです。これなんかは比較的そういった意味では、小さな歴史、小さな歴史といっても国レベルですから、小さいとはいえ比較的大きいんですけれども。

それに対して「六国史」。これもよく、これらあたりになるとあれなのかな、中学入試、中学入試には出ないですね、高校入試ぐらいから出ますかね。『古事記』だとか、『古事記』は「六国史」には入んないですね。『日本書紀』から始まる六つの歴史ですけれども、これはどちらかというと、天皇制中心の歴史ですよね。つまり、『日本文徳天皇実録（にほんもんとくてんのうじつろく）』なんていうのがその「六国史」の中に入っているように、天皇の歴代の歴史、これを国の歴史として編纂させています。そういった「六国史」のレベルになると、これはもう大きな歴史になっていきます。

今日お話ししたいのは、やはりその地域の歴史というものをどう捉えるかということで、まあやはり参考になるのは「風土記」だろうと思います。もちろん「六国史」の流れはずーっとあるんですよ。

例えばですね、鎌倉時代の歴史書として有名な『吾妻鏡（あずまかがみ）』というのがありますけれども、あれなんかは鎌倉幕府の歴史。で、そのあと、室町時代に『後鑑（のちかがみ）』という歴史書があるんですが、これはあまり有名じゃなくて、そのあと江戸時代になりますと、今度は『徳川実記（とくがわじっき）』というですね、徳川幕府の歴史。それは全部、『吾妻鏡』ならば鎌倉幕府が、そして『後鑑』であればこれは室町幕府が、『徳川実記』であれば徳川幕府が編纂させています。ようするに、国家の事業と言いましょうか、国家権力を握っている人が、自分たちの政権の歴史をきちんと遺そう。

で、これ私が口癖のようによく言うのは、歴史というのはやっぱり、勝者が書いた勝者の歴史で、そういう勝者達、権力者がやっぱりどうしても自分に都合のいい歴史で書いてしまう傾向があるので、いわゆる「六国史」的流れの歴史を史料として使う

時には、よっぽど注意していかないと、敵というわけじゃないですけど、権力者の罠にはまってしまう、という危険性が常につきまとっています。それをある意味では、こう、フォローする、あるいはそれを軌道修正していく、そういう役目を果たすのが、私は「風土記」の流れ、というふうに理解していまして。まあ、単なる「六国史」的なですね、先程言いました『吾妻鏡』だ、『後鑑』だ、あるいは『徳川実記』さらには明治になってから、この明治天皇の歴史で『明治天皇記』なんてのが出てくるわけですけれど、そういうものだけで歴史を見ていたんでは本当の歴史は見えてこない。

秀次事件

いろんなケースバイケースがあると思うんですけれども、例えばちょっと一つだけ例を挙げておきますと、最近私が特にちょっと気になっているところなんですが、昨年のＮＨＫの大河ドラマの話にもなるんですが、番組の後半の頃で、秀次事件というのを扱いました。豊臣秀次、例の秀吉のお姉さんの子供ですね、甥。その秀次が、秀吉に最初、鶴松という男の子が生まれたんだけども、三才で死んじゃって、もうあと子供ができないだろうっていうんで、甥に関白を譲る、あ、その前に養子に迎え、関白を譲った。で、その直後に秀頼というね、淀殿との間にもう一人男の子が生まれたので、邪魔になっちゃったわけですね。

で、いわゆる秀次事件ということになるんですが、従来の歴史的解釈は、そのあたりを秀吉の伝記、これは『太閤様軍記の内（たいこうさまぐんきのうち）』という本がありまして、それによって大体語られてきてしまっている。と言うことは、これは大村由己（おおむらゆうこ）という人が書いた本なんですけれども、もちろん秀吉の家臣ですから、秀吉のことを悪く書かないんですよね、秀吉びいき。で、まあようするに、これは勝者が書く勝者の歴史ですから、誰か悪者にしないと、勝者の正当性が伝えられないということで、もう思い切って秀次を悪者に、悪者にというかたちで、その『太閤様軍記の内』という秀吉の伝記は書かれている。

それを読んで頂くとね、えーっ、こんなことまで書くのかなと思うくらいに、ほんとにすごいことが、秀次が夜な夜な京都の町へ出てね、千人斬りをしただとかね、あるいは法皇が亡くなってまだ喪中なのに、比叡山で鹿狩りをしたとかね、あるいは聚楽邸の天守の上から道行く人に鉄砲を撃ちかけたとかね、そんなことばっかり書かれていて、いかにも生きている人を殺すのを楽しんでいるような秀次像がそこで描かれて。それが従来ずーっと語り伝えられてきたもんですから、まあ、あの秀次事件とい

うのは、秀次がそういう殺生を犯して、それで人望を無くしたから、秀吉によって、もう失脚させられたんだ、というかたちで伝えられてきたわけですね。

私は数年前にＰＨＰ新書の一冊で『豊臣秀次』という本を書きまして、あれは、秀次はそんなに悪くないと、まぁ言ってみれば、冤罪である、というような論調で書いてみました。で、去年の場合、その本を脚本家の大石静さんにプレゼント致しましてね、「この線で書いてくださいよ、はずれたら承知しませんよ」、ちょっとね脅しをかけながら、やってきたんですけれども。まあですから、従来の秀次像とはずいぶん違ってきたと思います。

それはなぜかって言うと、私が近江の研究をけっこう若い頃からしてきたことに由来するんですね。つまり全国的な歴史だけ見ていたんでは、本当の秀次像は見えてこない。しかし、近江でいろいろと現地調査をし、残されている古文書を持っているお宅を訪ねたりなんかしてゆく中で、秀次という人物について、そんなに悪くは、みんな言ってないんです。で、特にまあ、近江八幡（おうみはちまん）、現在の滋賀県・近江八幡市なんかでは、もう「まち」を創ってくれた恩人である、とさえ言っている。そういう人物がそんなに悪者なのかな、というのが最初の疑問でして、いろいろ調査を重ねてゆく中で、そうではない、そういう結論に私なりに達しましたので。

そういった意味でいきますとね、歴史というのは、大きな歴史だけを見ていたんではやっぱだめで、地元の小さな歴史から明らかにしてゆかなければいけない部分もある、というのを、ここんところではですね、一番言いたかった点です。

風土記の流れ　近世の地誌　近現代の県史・市町村史

そうした小さな歴史、そのつまり、地域の歴史を繙いてゆく上では、先程言いました古代の『播磨国風土記（はりまのくにふどき）』だとかいろんな「風土記」がある。それと並んでですね、あとの時代になってきますと、近世のいわゆる「地誌」、と言うのが非常に注目されるんですね。

静岡県の場合で言いますと、遠江の方では『遠江国風土記伝（とおとうみふどきでん）』というりっぱな地誌があります。これは今は浜松市になっちゃいましたと言うと、浜松の人は怒るかもしれませんが、天竜市（てんりゅう）、旧天竜市、そこにいた、昔はもっと別な村名があったんでしょうけれども、そこの内山真龍（うちやままたつ）というね、神官の方が編纂した『遠江国風土記伝』というのが、りっぱな地誌がございます。駿河の国でも『駿河志料（するがしりょう）』だとか、『駿河国新風土記（するがのくにしんふどき）』だとか、駿河の場合は『駿河記（するがき）』っていうのが結構いい史料です

ね、地誌では。もちろん、県立中央図書館に行きますと今はみんなもう全部、活字でみれますけど…。

そういったものに結構詳しい歴史がみえて、書かれている。そういうものを見た上で全国的な歴史と対比してみる、という作業が、私はどうしても必要だろうと。その近世の地誌のさらに現代版ということになりますと、そこに書いておきましたような近・現代の編纂になる県史、あるいは市町村史ということになってゆきまして。静岡県史が今から６・７年前に完成いたしましたけれども、そうした各県ごとに、そういうものがあるわけですので、そういうものから繙いてゆくと、その地域の歴史から、ようするに足場を固めながら、全国の歴史もみれるということになります。

官撰地誌と民間の研究

そういうものはですね、一般的には藩が江戸時代には編纂するものもあるんです。地誌、そこに「官撰地誌」という書き方をしました。そうですね、遠江の例の昨年ちょっと話題になってきました掛川（かけがわ）。『掛川志稿（かけがわしこう）』というやはり地誌があるんですけれども、これ実は掛川藩が、編纂させてるんです。ですからその藩主によってはですね、学問好きの藩主がいた場合には、そういう藩がお金を出して、学者を雇って、それで地誌を編纂したりしているんですけれども。

そうした官撰地誌というものと、先程言ったのはいずれも民間の方々です。内山真龍は先程言いましたように神官、それから『駿河国新風土記』の新庄道雄（しんじょうみちお）とかですね。新庄道雄の場合は確か幕臣でこちらへ来ていたのかな、そんな感じでようするに、もちろん自分の手弁当でいろいろ調査をし、それをまとめているというかたちになりますので、ある意味では民間の研究と言う事になるかと思います。

私は国立大学、まあ最近は国立大学法人ということで、単なる国家公務員ではなくなったんですが、いずれにせよそういう大学に勤めているので、どちらかというと私が書いたようなのは、官撰ということになっちゃうのかもしれませんけれども、気持ちとしては文字通り、民間の一人としてやっていますので。

例えば、今日はお見えになっていらっしゃいませんが、呼びかけ人の名前にさっき入ってました、瀬名中央にお住まいの水野茂さん、なんていうのは、静岡古城研究会の、いま会長さんだし、一緒にいろんなところで調査に行ったりなんかして、私の方も学んでいますけれども。そうした人達との交流で、やっぱり単なる部屋にこもってですね、勉強しているだけでは見えてこない地域の歴史というものに接して、それを

私の場合には全国的なそういう大きな歴史のなかに生かしながら、それをまた還元しようということで、少しずつ努力しているわけなんですけれども。

２　瀬名・千代田・古庄の歴史

そういったところをですね、今日はレジュメの２番のところで少し、瀬名（せな）・千代田（ちよだ）・古庄（ふるしょう）、今回のこの竜爪山の九条の会の地域に即した歴史で、ちょっとトピック的なと言いましょうか、話題提供的に少しお話しをさせて頂きたいと思います。

文献上にはじめて出てくる瀬名

私自身、歴史やってて、やはりこう、地名の由来とかね、そういったのに非常に関心を持ちます。なぜそういう地名が生まれてきたのかな、というようなことで色々なケースに接することになるわけですけれども。

今日のこの会場の場所の瀬名、さきほど郷倉（ごうぐら・ごぐら）の中、初めて、外観はね、前見たことはあったんですけれども、鍵開けてもらって中を見たのは今日はじめてで、嬉しかったんですけれども。こうした郷倉なんかがある、この瀬名というのは結構歴史は古いわけですが、ただ文献上、意外なことに、瀬名というかたちで出てくるのは意外と新しい。

私なりに調べているところでは、寛正（かんしょう）６年といいますから、西暦で1465年ですね。京都の蜷川親元（にながわちかもと）という人が書いた『親元日記（ちかもとにっき）』という日記の中で初めて遠江今川氏、これはご承知の方多いと思いますが、例の今川了俊（いまがわりょうしゅん）ですね。今川了俊系の今川氏の所領の中に、この駿州の瀬名というのが書いてある、というのが、ある意味では一番早いものではないかなと思います。

瀬名氏・堀越氏

その瀬名氏ですけれども、現在、袋井（ふくろい）市に堀越（ほりこし）という所がございまして、そこは堀越海蔵寺（かいぞうじ）というお寺がございます。そこが今川了俊の菩提寺、何年か前に調査に行った時に、そこの住職さんが今川という表札なんですよね。びっくりしましてね。えっ、あの今川了俊の、なんかゆかりの方ですか、と言ったら、いやそうじゃなくて、今川了俊の菩提寺だから、いつとはなしに誰かが今川を名乗っちゃって、そのままになっているんだという話をされていましたけれども。とにかくその堀越にいた堀越氏とい

うのは、今川了俊の末裔というか子孫なんですね。

ご承知の方多いと思うんですけれども、今川氏というのは六代目、今川範国(のりくに)から数えて六代目の範忠(のりただ)の時にですね、幕府から、つまり将軍から特別な恩典、特典というか、それをもらっています。それはどういう特典かといいますと、今川という名字は本家だけ名乗ってよろしい、分家は今川を名乗ってはいけない、という言い方をしています。つまり今川というのは足利から吉良がわかれ、吉良から今川がわかれた名門なんで、本家だけ名乗ることを許す、という恩典をもらって、その結果その時期に、今川の一族でそれぞれ住んでいた所の名前を名乗ることになります。

ですから堀越、今の袋井の堀越に住んでいた人は堀越氏になり、そしてそのわかれがこの瀬名に所領を持っていて、瀬名に住んだので、ま、最初はたぶん堀越を名乗ったと思うんですが、その土地の名前、瀬名を名字にした、というかたちで、瀬名氏が生まれてくる。さきほどキリスト教・教会の方がおっしゃってましたけれども、あの瀬名姫がまさにその、ここに住んでいて、関口氏の娘ということで、それで瀬名姫と名乗ってゆくということになります。

堀越一秀(ほりこしかずひで)という人がここに初めて住んで、瀬名氏を名乗ったわけですけれども、その一秀のお父さんの堀越貞延(ほりこしさだのぶ)の菩提寺が、ご承知の方が多いと思いますけれども、光徳院(こうとくいん)、そして一秀の菩提寺が光鏡院(こうきょういん)ということになってまいります。これは今川時代、駿府のですね、お浅間(せんげん)さんのいわゆる役銭(やくせん)、流鏑馬(やぶさめ)役を務める村として、この地域は注目されています。

今川氏・中村氏・大久保氏

そのあと、今ちょうど大河ドラマで、寿桂尼だとか、雪斎とか出てきておりますけれども、ご承知のとおり、今川氏というのは、今川義元が永禄三年の桶狭間で討たれた後、子供の氏真(うじざね)が後を継ぐわけですけれども、だんだんだんだん落ち目になってゆくわけですね。これはまあやっぱり今川義元という、すごいカリスマ性を持ったリーダーがいた、しかもその義元には雪斎という名補佐役、これはよく軍師とか執権とかいう言い方をいたしますけれども、素晴らしい人が付いていたから、今川家は大きくなったわけですけれども。その雪斎の方が先に亡くなり、義元も亡くなったということで、その後は子供の氏真の段階では、ずるずるずるずると下り坂になってしまい、とうとう永禄11年、西暦1568年の12月、武田信玄によって攻められて、氏真は掛川(かけがわ)へ逃げてゆく。逃げた掛川を今度は徳川家康に攻められて、ついに滅亡と、いうことに

なるわけですけれども。

その今川家が滅んでゆく過程で、この瀬名それからこの地域ですね、沓谷(くつのや)あたりまでかけて、やはりそうした歴史をいろいろと伝えているわけですけれども。今川家が滅んだ後は、これは昨年の大河ドラマにも出てきていました中村一氏(なかむらかずうじ)、これが駿府城主として入ってまいりまして、その中村一氏の支配下に置かれます。もちろんこの瀬名、それからまあ、旧千代田村の方ですね、そちらの方も全部ひっくるめて、まぁだいたい中村一氏領になるわけですけれども。その中村一氏が慶長５年、西暦1600年の関ヶ原、その直前に一氏は亡くなりまして、跡を継いだ一忠(かずただ)は、米子の方へ移されてまいります。そんなことで中村一氏時代の支配は終わるわけですけれども。そのあと一時期、駿府藩領になったりしながら、まあのちに大久保氏、旗本・大久保氏の所領になったりしてくるわけです。そういった戦国期、あるいは近世初期の歴史が一つ注目されるわけです。

家康ゆかりの伝説地　幕ヶ谷・水梨

この地域は、ですからその、家康ゆかりの伝説地もかなりあります。例えば、これは私行ったことはないんですけれど、幕ヶ谷(まくがや)という地名の所、家康が川狩りに来て、川狩りっていうのは鷹狩りとは違いまして、ようするに投網を打ったりなんかする、釣りをしたりとか、そういうあれなんですけれども、その時に幕をめぐらして、そこでまあ休憩した、本陣にしたという場所であるとか。

あるいは水梨(みずなし)という地名の所ではですね、そこに住んでいた老夫婦が、梨を家康に献上したところ、まぁこれはどこまでほんとかわかりませんけれども、伝説というのはえてしてそういうことが多いんですが、その老夫婦に、這い回った部分の土地を与えるよ、といって、一所懸命老夫婦がその土地を這い回った所を貰ったというようなね、そんな伝説もあったりして、けっこう歴史豊かな場所ということになるかと思います。

梶原景時

いきなり戦国に入っちゃったんですけれども、今日の先程の資料を見させて頂いていましたら、この地域、やはり、梶原氏の関係ですね。それこそ鎌倉幕府初頭、例の梶原景時(かじわらかげとき)が、三代将軍実朝の前、頼家の段階で、二代将軍の頼家の、いわば参謀・補佐役として実権をふるうかにみえた時に、同じ頼朝の家臣で、しかも頼朝夫人、北条

政子のお父さんでありました北条時政が仲間を募りまして、むしろ、ようするに頼朝が亡くなった後、本来は二代将軍として頼家が実権をふるう。ところが、その頼家の補佐役的な存在だったのが梶原景時で、頼家に全部実権を握らせると、牛耳られてしまうということで、頼朝の御家人達や、とくに北条時政を中心にして、まあいわば梶原景時を、追い落としをはかるわけですね。その策謀の中で、結局は梶原景時自身は、京都と手を結ぼうとして鎌倉を脱出し、まあ東海道を一所懸命西へ向かって馳せ上ってゆくわけですけれど。その途中、いわゆる入江武士団とかいうかたちでの、吉川小次郎とかね、そういう人達のある意味では待ち伏せを受けて、そこで梶原山であえない最期を遂げるという。そういう鎌倉幕府初期の全国的なそういう政治史の中にも位置づけられるような事件が、この地域で起きているというところも、非常に注目されるところではないかというふうに思います。瀬名川の矢射タム橋、旧長尾川の所、そんなところもですね、非常に注目されるこの地域の歴史ではないかと思います。

瀬名川と瀬無川

で、あと、「瀬名川」というのは今は、「瀬」という字に「名前の川」と書きますけれども、古い文献を見ますとね、「瀬」という字に「無い」という字を書いた、「瀬無川」というかたちでも出てくるんですね。『経覚私要抄』という、京都から鎌倉に到る宿駅を書き残した、「きょうかく」と読むのが正しいんですが、お経の「経」に、覚える・覚悟の「覚」。で、その経覚という人が京都から鎌倉へ行く途中の宿駅をメモした、その中に、「瀬無川」というふうに出てきまして、それは瀬が無い川と出てまいります。そんなところをね、この地域としてはちょっと注目しておいていいと思います。

千代田・古庄

あとですねぇ、千代田、古庄の方の関係では、やはりこの地域は、先程お話致しました、お浅間さんの流鏑馬役を奉仕する村々の中に、この地域の名前がたくさん出てまいりまして、とくに古庄なんかは、曲金とか、あるいは焼津になるんでしょうか、八楠、そういった地名とともに出てきます。ただ天文18年・西暦1549年の今川義元の文書を見る限りでは、その浅間さんの役銭をですね、滞納しているという、ちょっと不名誉なというか記録も残っておりますけれども。いずれにしてもその今川時代はそういうかたちで、すでに村として成り立っていたということがわかってまいります。

で、やはり、古庄・千代田の方もそうなんですが、やはりこう、家康の関係ですね。どこまでそうなのかってのは、私も最終的に追いかけてはいないんですけれども、「千代田」という名前、これは旧千代田村というのは、たしか明治22年から昭和９年ですね、静岡市に合併される前、旧千代田村というのがあったんですが、それが銭座町(ぜんざまち)から上沼上(かみぬまがみ)まで１町12ヶ村、そういう、かなり広範囲の村であったわけですけれども、その千代田村というその「千代田」という語源。家康がですね、駿府城に在城していた時に、ちょうど今年、徳川家康・大御所400年祭ということで、市が一生懸命力を入れておりますけれども、駿府城に隠居して400年ということになるんですが、その時代にこの地域に来て、鷹狩りに来て、一面の水田地帯を見て、「まさに千代田の里だ」と言ったというのが、伝承ということで伝えられておりますけれども。

谷田（やとだ）と漁業

巴川(ともえがわ)それから長尾川を中心とする、やはりこの地域というのは比較的低湿地、で、しかも安倍川(あべかわ)とかですね、富士川とか、ああいう大きな川の場合には、戦国期の段階ではですね、まだ穀倉地帯とはいえない、なってないんですね。だいたい中世の水田地帯というのは、どちらかって言うと山の方、いわゆる谷田という言い方をします。「たにだ」と書いて「やとだ」。ですから、その谷田に継いで、比較的開発が進んでいたのは、巴川とか、あるいは長尾川沿いのような、比較的低湿地地帯ということで、比較的そういった意味では農業が盛んなところなんです。

ただ同時に、これね、私ちょっと、明治末期のデータを見ていて、ちょっとびっくりしたのは、この頃の旧千代田村のですね、生業つまり、どういう産業で成り立っていたかというデータで、農家が70％なのですけれども、意外とですね、漁業を営んでいる家もあった。34戸、これは多分、巴川あるいは麻畑沼(あさばたぬま)の淡水魚をとる漁業だろうと思います。こういう淡水魚をとる漁業でも、それを生業にしているお宅がずいぶんあったというのに、ちょっとびっくりしたんですが、考えてみると私がちっちゃい頃やっぱり、浅畑沼へ行ってですね、鮒をとったりした覚えがありますので、そういうかたちでの生業という事もあったのかな、というふうに思っているところです。

まあそのお話ばっかりしていますと、今日の主題の方にもなかなか行き着かないので、あとの方で、もし質問等あれば、お答えしたいと思いますので、レジュメの３番の方へ入らせて頂きます。

３　歴史を学ぶとはどういうことか

歴史を学ぶ面白さ

そこにですね、まず私、歴史を学ぶ面白さというかたちで書かせて頂きました。大学だと比較的自由な、けっこう歴史の学び方ができるんですが、中学・高校まではどうしても年代暗記だとかね、覚えなきゃあいけないという先入観で、ちょっと歴史っていうのは退屈であるという印象を持たれる方が多いと思うんですけれども。ほんとの歴史はそうじゃない。よく私は言うんですけれども、確かに基本的な知識として、今の書かれている教科書ぐらいなことは知っておく必要があるけれども、教科書に書かれているような歴史が、歴史の全てではないんだと、というのが私の持論なんですね。それはどうしてかっていうと、いろんな解釈ができるのが歴史、あるいはいろんな謎を解いてゆくのが歴史だ、というふうに考えているからなんです。その辺を少しお話しさせて頂きたいと思います。

よくですね、“歴史は鏡である”という言い方をいたします。それは確かにそうなんですね。歴史書には例えば平安時代なんかで言うと『大鏡』、あるいは『今鏡』、確か『増鏡』『水鏡』なんていう鏡ものがいっぱいあります。それからさっきもちょっと名前を出しました『吾妻鏡』、『後鑑』というね、歴史書になぜ鏡という字が付くのかということなんですけれども。まぁこれは、ようするに、“鏡はそこに過去を映し、未来を照らす”という、ようするに、過去・現代・未来がそういったかたちで続いていくという捉え方になります。で、多くの場合、その歴史は鏡であると言ったときに、歴史上のですね、人物の成功例、あるいは逆に失敗例、そういったものをあげながら、それを学んでですね、自分たちのこれからの生き方につなげてゆくという考え方で、これ私に言わせると一種の、いわゆる教訓史観、歴史からなにがしかの教訓を学ぶという学び方だと思うんです。

事実、昔からですね、よく「前車の轍（てつ）を踏まず」とかね、あるいは「前車の覆（くつがえ）るは後車の戒め」というような言い方をいたします。例えば前を行っている車がちょっと溝に落ちちゃった、そうすると、あとから来る車はそれを見て知っているから、そこは迂回して溝に落ちないようにしようと、そういう先人の失敗を学び、同じような失敗をくり返さないという点で、それは歴史の学び方として一つは言えることではあるが、しかし、それだけではないですね。歴史を学ぶ面白さっていうのはむしろ、その先にある。何と言ってもですね、私は歴史を学ぶ面白さっていうのは、やはり見方

によって違ってくるし、受け取り方によって、一つの事実も異なって見えてくる、こういうところにあるのではないか。

これはほかの所でも、本でも書いているので、もしかしたらその本を読んだ方は、もうああそんなの古いよと、言われちゃうかもしれませんけれども。少し前に、現在の京都の西芳寺、行かれた方もいるかもしれません、苔寺で有名なね、あのお寺に、住職が書いた『三体詩抄(さんたいししょう)』という本が残っているんです。それを見ていてある時ふっと、へぇー、っと思ったのは、例の足利義政のことを書いた部分で、その希世霊彦(きせいれいげん)という、その足利義政の時代の和尚さんの書いた文章で、足利義政が世間が飢えているのを見るに見かねて、その西芳寺の庭を修復するのに、飢えている人達を働かせて賃金を与える、という趣旨のことが書いてある。従来、私なんかも含めて多くの方は、あの足利義政というのは政治から逃避しちゃって、例の東山銀閣にこもってね、趣味三昧の生活をおくって、それで世間が飢えているにもかかわらず、お寺を造ったり、庭を造ったり、浪費した、という言い方で今までは語られてきた。しかし、そのお寺、当の西芳寺ではそういう書き方をしている、まあもちろん、お世話になった足利義政に悪くは言えないから、そういうふうに書いた、という側面も全くないわけではないんでしょうけれども、ある意味では事実の一端を突いてるのかな、という感じもいたします。

そういった意味でゆきますと、従来知られている事実と思われていることも、少し見方を変えて、あるいは別な史料をそこにはめ込んでみると、違う捉え方が可能だ、というのがですね、私は歴史を学んでゆく時の、一つの発見なんだ、というふうに思います。

で、それに気がついたのは、もう私これ若い頃です。まだ大学院生の頃に、滋賀県の、お寺の名前忘れちゃったんですけどね、機会があればまた行って、その感動を味わいたいなと思うんですが、湖東三山と言われる、金剛輪寺(こんごうりんじ)・百済寺(ひゃくさいじ)、そのあたりじゃないかなと思ってるんですけれども。あるお寺に行って、本堂に案内されて、仏像を拝ませてもらった。その時住職さんがですね、外側の戸を全部閉めちゃうんですね。で、電気も消しちゃう。真っ暗になったところで、住職がおもむろに懐中電灯を持ち出してね、仏像を一つ一つ照らし始める。で、明るい、まあ明るいって言っても、お寺ですからそんなに明るくはないんですが、まあ一応、電気が灯っている中で見た仏像の姿と、住職さんが懐中電灯で照らしだしてくれた仏像が、全く別な仏像に見えた。こういう経験があります。そんなところをみてゆきますと、これは光の当て方で、一つの事実も違って見える。歴史上の人物も違って見えるんじゃないか、という事を、

実感としてですね、体感したということになります。

どうしても歴史上の人物ということになりますと、われわれ、いわゆる定説とかあるいは通説というものにしばられがちで、日本人好みの勧善懲悪ですね。正義を助け、悪をくじくという、水戸黄門の世界のようなかたちが、一般的に理解されていて、誰かが悪人になって、そうするとそのマイナスイメージが強調されたりする。まあ先程の、例の秀次のケースはその例です。ですからそういった意味でいきますとねぇ、なんとなくこう、一面的にみただけでは歴史を正しくとらえることにはならないのではないか。そういう目で見てゆくってことが、非常に必要だろうなと思っています。

歴史から生き方の指針をつかむ

その下に、歴史から生き方の指針をつかむ、というかたちで書かせて頂きました。これは、どうしてもね、まぁ、今の高校・中学の教科書にしても、小学校の歴史の本にしてもそうなんですけれども、どうしても、「英雄史観」ですね。例えば戦国時代で言えば、信長だ、秀吉だ、家康だ、というかたちで、あるいはもっと古い方で言えば、いわゆる天皇が、藤原氏が、そういう、まあ権力者が歴史を動かしてきたと、とらえてしまいがちなんですけれども。学校現場だけではなくて、社会に出て目にする映画・テレビあるいは小説なんかにしても同じような傾向がある。そうなりますと当然のことながら、歴史というのは、そうしたある意味では、一握りの英雄というか権力者が動かしてきたというふうに、捉えてしまいがちなんですね。で、私はそれは間違いだ、と思っているんです。

一つの例として、戦前ですけれども、東条英機内閣の外務大臣、戦後いわゆる降伏文書に調印をした、重光葵（しげみつまもる あおい）。葵区の葵という字を書くんですが、読み方は「しげみつまもる」その人の著作集が出ておりまして、その中の一冊、第一巻にですね。「日本人が政治を見ること、あたかも芝居を見るごとく、鑑賞はしても自分自身は役者の一人である、自ら舞台の上にあることを悟っていない」とはっきり書いてある。ようするに、歴史をただ、傍観者的にみてしまっている。本当は自分たち日本人一人一人が歴史を作ってゆくにもかかわらず、誰かが演じている、役者さんが舞台で演じているように、そういうものをただ観客として、われわれ一般庶民は見ているにすぎない、という指摘をして。あぁ、そのとおりだなぁ、と私思ったんですけれども。

ようするに自分たちも歴史を動かしている小さな歯車の一つ、ということに、意外と気付いていない。で、それはやっぱり、自分の生き方、歴史をですね、自分の生き

方にどうつなげていくか、ということにつながってゆくんではないのかな、というふうに思っています。

歴史の学び方はある程度、実はまあいろいろあるわけですけれども、私はやっぱり、歴史から自分の生き方をつかむというね、その視点を大事にしたいと考えている一人なんです。というのはなぜかと言いますと、歴史はこう、自由にあるいは自然にできるものではない。人間によって創られるわけですけれども、それもただ、自分が思うように創れるわけではないんですね。過去から持ち越されてきた、さまざまな条件というか、環境というか、そういう中で歴史を創ってゆく、というのが今のわれわれだと思うんです。そういった意味では、単に歴史を懐古趣味に終わらせるものではなくて、先人達の労苦あるいは、それをどう乗り越えてきたのかということを学ぶ、それがイコール歴史を正しく学びとり、しかもそれを批判的に受けとめることによって、例えば権力に抵抗していった戦いの歴史というものを、主体的にですね、捉えることができるのではないか、ま、そういうふうに思っているところです。

変革を恐れない魂を培う

で、もう一つ、これ２枚目の方になりますけれども。「変革を恐れない魂を培う」という、ちょっと精神的な言い方になっちゃいましたけれども。やっぱり歴史を学ぶときにですね、われわれ、一つ注意しておかなければいけないのは、今われわれが知ることのできる歴史というのは、これはあくまで結果である、ということなんです。歴史をたどる、あるいは歴史を探るといった時に、あまりこう気にしないかもしれないんですけれども、どうしてそうなったんだろうかということを、あまり考えないで、どうしても結果を歴史として受けとめてしまう傾向がある。しかもそれをただ振り返るだけ、になってしまう。これでは本当の歴史を学んだことにはならない。ようするに、私はよく言うのは、結果をただ追うのではなくて、結果が出る前の段階に、こう、自分をおいてみる。

つまり、いろいろな例はあるんですけれども、一つちょっと例を、具体例を挙げておきますと、戦国時代末期の歴史をですね、教科書ふうにちょっと言えばですね、例えば室町幕府が滅亡し、それに代わって織田信長が台頭し、信長の比叡山延暦寺焼き討ち、あるいは石山本願寺との戦いで宗教勢力を封じ込めた。それを次の秀吉にバトンタッチしてゆく、という捉え方になってしまうと思います。確かに結果としてはその流れなんです。

が、結果が出る前はどうだったんだろう。実は、信長が宗教勢力を封じ込める以前、我が国には武士の支配の及ばない地域が、実は無数に存在していた。例えば加賀の国、今の石川県ですね、よく史料なんかには「百姓のもちたる国」という言い方で出てきます。これは最近ようやく戦国史研究者の間では、注目されるようになってきた、いわゆる「惣国一揆（そうごくいっき）」、つまり武士のそういう政権の流れというか動きと、いわゆる住民自治の動きですね。これは一向一揆なんかの研究の中で、今の若い人なんかはですね、いわゆる自治共和国、つまり加賀の国自治共和国、あるいは紀州惣国一揆のことを、紀州自治共和国あるいは一揆体制、というような言い方をして、つまり権力とは違う、農民達自身の国を創る動きも実はあった。そのせめぎ合い、ま、これが戦国の末期だったんですよね。ですから本願寺門徒共和国という言い方をする人もいます。そういうものが各地にできてきた。それに、ある意味では、危機感を持ったのが信長であり、その信長の流れを受け継いだのが秀吉であり、家康だということになってきます。

結果としては、ですから宗教勢力はそれで封じ込められた。しかし二者択一というふうなかたちで、どっちに進むか、ほんとはわかんなかった。その本当はわかんなかった、負けた側を、やっぱりきちんと掘り起こすという作業をですね、歴史研究としては、私は重要ではないかな、というふうに思います。と言いますのは、やはり歴史というのは、いくつかある可能性の中からですね、たった一つが選ばれて次へ進んでくるわけです。ですからその可能性がどのようなものであったのか、という事を考えることは、そういう意味では非常に重要だし、同時にそれは、世の中はやっぱり変化してゆくんだ、という認識にもつながってきます。

よく、歴史を学ぶことは今の我々にどう役に立つのか、というふうな言い方を、質問を受ける事があるんですけれども、まあ私はやっぱり、歴史を学んで変革を怖れない、そこのレジュメにも書いておきましたように、魂を培うというところに、やっぱり一つは行き着くのかな、というふうに考えております。

4　歴史を学ぶことでみえてくる「憲法９条」の重要性

さて、そういう立場で、レジュメの４番になりますけれども、つまり歴史を学ぶという事でみえてくる、憲法９条の重要性について、最後にお話をさせて頂きたいと思います。

戦争と歴史認識

憲法９条、まあようするにこれは極端な話、「もう戦争はごめんだー」というね、今日、最初、冒頭お二人の方から発言がございましたけれども、そういう思いが、戦争放棄に当然つながっているわけです。

そういった意味でいきますと、改めて言うまでもない事かもしれませんけれども、日中戦争の開始からアジア・太平洋戦争の終結まで、特におとなり中国ではですね、1000万人を超える方々が死傷しておりますし、ベトナムだとかインドネシアあるいはフィリピン・インドその４カ国だけでも、860万人以上が殺されているわけですよね。一方日本軍の方でも、死者が155万人ですか、あと、うちの父なんかもそうだったんですが、シベリアに抑留されたりなんかして、30万人ほどですね。それから空襲あるいは原爆、さらには沖縄あるいは満州で殺された、そういう非戦闘員だけでも100万人に達しているという。

これだけの犠牲を払った戦争というのは、少なくとも日本の歴史では、それまでになかったわけだし、そうした悲惨な戦争体験、犠牲を払った、ということが、ある意味では、こんにちの日本のですね、平和を支えている。その、思い、というのが実は、やっぱり憲法９条に結実しているのではないか、というふうに思います。

悲惨な戦争体験が日本の「平和」を支えている

そういった意味でゆきますと、レジュメの４の二番目の所に書いておきましたけれども、そうしたやっぱり悲惨な戦争体験が、日本の今の、括弧付きかもしれませんけれども、平和を支えているということが言えると思いますし、そのためにはですね、何が正しい歴史で、何が嘘の歴史かっていうことをですね、見極めていく必要があると思います。

ようするに、嘘の歴史あるいは作られた歴史からは、正当なですね、歴史認識というのは当然生まれてきませんので。これはずーっとですね、長い間、例の南京大虐殺の件とか、あるいは従軍慰安婦の件なんかは、ある意味では封印されてきちゃった例でして、そういうこう、一種、最後に言った、そういう意味では、正しい歴史をですね、ある意味では後世に伝えることはできない。

まあ未だに根強くあるのは、戦争っていうのはそんなに悪い物ではないんだよとかね、あるいは戦争によって経済が復興することもあるんだよとか。さきほど冒頭お話しがあったように、科学は戦争によって進歩するということもあるんだよとか、そう

いうかたちで戦争を弁護する方ってのは、若干いらっしゃるわけですけれども、そういう空気を生み出していくのはやっぱり、本当の悲惨な戦争体験という事が、きちんとですね、語り伝えられてきていないという、そういったところにも、根があるのではないかというふうに思います。

「憲法９条」を守る運動と歴史の担い手

最後のところで憲法９条を守る運動と、歴史の担い手というところでふれておきたい点なんですけれども。ようするに、先程もちょっとお話しいたしました、われわれ一人一人がたんなる傍観者ではないという事。ちっちゃいながらも歴史を動かす一つの小さな歯車だという事。ようするに、われわれ一人一人が歴史の担い手なんだということをですね、どう捉え直すかという、そういうことになってゆくんではないか、そういうふうに思います。

よく言われるように、これは中国古代の政治論書なんですけれども、『貞観政要（じょうがんせいよう）』という本がございます。その中に「創業と守勢といずれか難し」。つまり「ものを創り出す」のと、「それを守ってゆく」のが、どっちがたいへんかという、その話がある中で、結論としては「創業も守勢もいずれも難し」どっちもたいへんだ、というのが結論なんですが。

憲法９条が、さきほど冒頭のごあいさつにあったとおり、あるいは佐藤元学長のですね、メッセージにもあったとおり、鈴木安蔵（すずきやすぞう）さんたち、民間憲法研究グループがいろいろ試案を出したりなんかしながら、それがまあ今に生きている憲法９条と言いましょうか、日本国憲法に結実したわけですけれども。そういうからみの努力、それを守ってゆく、われわれの努力というのが、実は大きな差はない。どちらも大事な事業なんだということです。

極端な言い方をしちゃえば、これまで何もこれといった運動をしてこなかったという方でもですね、この９条を守る運動をしてゆくことで、私は歴史に主体的に参加する、ということになる、というふうに思っております。

これを最後の締めの言葉にして、ちょうど時間がまいりましたので、講演の方は以上で終わらせて頂きます。

ご清聴ありがとうございました。

質問と小和田先生のお答え

質問　素晴らしいお話ありがとうございました。話の中で、正しい歴史とつくられた歴史を見極めることが大事だという話があったんですけど、今のこの世の中、たくさんの歴史が飛び交っていて、その見極め方が、僕らでは、何が正しくて、何がつくられた歴史かっていう、見極めがあまりできないのが現状なんですけど、どうして見極めたらいいですか。

お答え　えーっ、難しい質問でー……。あのぅ、そうですね、年配者の中にはあれでしょうね、やっぱりこう、大本営発表の、あれを、まあ知っている方は多いと思うんですけれども、あれはほんとの偽りの歴史でして。ようするに、あれは負けていても転進だ、とかね、そういう言い方で、こーっ言ってくる。

ようするに、なぜそういうふうな話をしたかって言うと、作家の永井路子さんってご存じですか。この地域でいうと『姫の戦国』というね、寿桂尼のことを中心とした。作家の永井路子さんと私何度かお会いしたんですけど、彼女が言うには、「私は、書かれている史料の半分しか信用しません」。ようするに、史料、つまり文字になっているからといって、歴史家の方は、結構それをどんどんどんどん信用して、いろいろ勉強しているけれども、私は史料になって書かれている半分しか信用しません。それはなぜか。自分は大本営発表を、あれを信じ込まされていたから、公の書かれているものっていうのは、あまり信用しないんですよ、とおっしゃていた。

まさにそうなんですよ。ですから、見極め方ってのは、まだ私はよくわかりません。難しいと思います。その時点では、そうみんな思いこんで、それが正しい、正しいと思っていても、何年かたつと、だから大本営発表の場合には、その敗戦後すぐ、あれは嘘だったんだ、とみんなわかったわけですけれど。それはわかんないまま、こんにちにまでずーっときている歴史もある、と思うんですね。これが一つ。

それとね、もう一つは、今度は逆に、嘘とほんとを見極めるというんじゃなくて、今のちょっと質問とは離れちゃうんですが、せっかく思い出したんでお話しますと。ようするに、従来わかっていなかったことも、何かの機会でわかってくるという歴史もあるという例、これを具体的に言いますと。

戦前ですけれども、いま、高校の教科書にもちゃんと載ってきます有名な、「山城国一揆（やましろのくにいっき）」、つまり山城の国の農民達は守護・畠山両方をを追い出しちゃったというね、あの有名な「山城国一揆」は、実は明治45年に発見されたんですよ。歴史そ

のものは、あれは1400何年ですか、年までちょっとよく覚えてないんですが、その頃起きた出来事を、明治になって発見した。それはなぜかって言うと、その発見した先生は、たまたまその頃、ちょうどお隣で、中国で、人民会みたいなものがあって、それが逐一情報として日本に入ってきて、その人民会議みたいなものが、どうも日本における「山城国一揆」と同じではないか、という視点で、三浦周行（みうらかねゆき）という先生なんですけれども、『戦国時代の国民議会』という論文で、初めて「山城国一揆」を発表しました。ですから、みんなこれは有名な史料で、高校の日本史の史料集なんかにも載ってるんですが、『大乗院寺社雑事記（だいじょういんじしゃぞうじき）』という有名な史料で、もう何十人の人が多分その史料を見ていたんだけれども、それまで誰も、農民達が自治を、自治会みたいなものを開いて、それで権力者を追い出したということに気がつかなかったんですね。

ですから両方の側面があると思いますね。今の質問の方の、どの歴史がほんとで、どれが嘘かってのを、見極めるってのは実は難しくて、同時にまた、史料にはあるんだけれども見つかっていないものも、これからまだ発見できるんですよと、いう、その二つをちょっとお話ししました。

質問　本日は、たいへん勉強になる講演をありがとうございました。私はちょうど社会専攻なので、瀬名・千代田・古庄の地域史についてのお話がありましたが、今後の研究などに参考にさせて頂きます。

歴史を学ぶということで、歴史を鏡と捉えて、遺された過去を見て、照らされた未来を考えてゆくという点は、たいへん、これから私たちにとって大事な観点じゃないかなぁって思いました。戦争をして、日本は反省をして、憲法９条をつくって、60年間憲法を変えなくてきたってことも、一つの歴史であると思うし。これから私たちの課題であるっていうのは、戦争を体験してないっていうところにあると思うんですよ。どんどんあの戦争に対する認識が薄れてゆく中で、憲法をいかにして守ってゆくかというところで。一番私が最近の出来事で疑問に思っているのは、イラクに自衛隊を派遣したことなんですけど、この憲法九条で戦力を保持しないと書きながら、自衛隊を派遣したっていうことは大きな矛盾であって、そのへん、イラク派遣を、小和田教授、先生はどのようにお考えなのでしょうか。

お答え　結論的に言っちゃえば、やっぱり私自身は、あれは憲法違反だ、というふうに思っています。ただし今の政権は、そう思っていなくって、やってるわけで。先ほど彼がね、ちょっと発言されたように、それこそ、ほんと戦後、ま

ず、これは皆さんご承知でわざわざ言うこともないかもしれませんが、警察予備隊というかたちで、今の自衛隊がスタートするわけですけれども、これがそもそも、ようするに、さっきの方、話にあったように、朝鮮戦争で日本の軍隊が使えないというのは、アメリカにとってはやっぱり、こりゃあ、予想外というか計算外というか、そういったことだったんで。いわゆるその頃はソ連が強く、また中国も強かったんで、いわゆる共産主義勢力を、こう、封じ込めるというか、日本がある意味では反共の防波堤になるというね、そういう位置づけが、その頃からされてきて。それに乗っちゃったのが例の吉田茂なんですよね、ですから吉田茂はそれまで一生懸命に・・・・、またそれを言い出すと、またちょっと時間がなくなっちゃうんですが、とにかくそういうかたちで。まぁ、そもそもが、ある意味ではアメリカの言いなりになりながら、そういうかたちで再軍備の方向へ少しずつシフトして、こんにちに到っているわけですけれども。ただやっぱり、さっきどなたかもおっしゃっていたように、戦後一度も日本は、そういう意味では外に出て行って一人も殺していない。というのは、そういった意味では、憲法九条が、あった、から、というかな。もちろん対外的には日本に侵略もさせないという、まあこれは比較的近い将来、もしかしたら危ないってこともあるかもしれませんけれども、そういうことで、これはほんとにもう、憲法９条ってのは日本の宝だと思います。

五井代表の発言

すいません。私、イラク自衛隊派兵、違憲であるってことで裁判に訴えて戦っています。静岡地裁では負けました。高裁で先週、５秒で、棄却されました。それでその次に、来週中に最高裁に訴えるつもりです。ただ司法そのものに、もう期待ができないんじゃないかな、三権分立ってのがほんとに成り立っているんだろうかってのが、あのぅ、高裁、東京高裁ですけれども、何の証言、話もさせてもらえませんでした。静岡地裁の場合には私も証言させて頂きましたけれど。そうなってくるとやはり、先程の話じゃないですけど、住民として身を張っていかないと、三権分立といいながらも、これ、最高裁でＯＫされますと、イラクは、派兵がＯＫってことになるんですね、出した事が。憲法違反じゃないということになりますから。これから大手を振って、政府はいろんな国に出していける可能性をつくってしまうもんですから、やはりいろいろ監視が必要だなと、そういう意味で最高裁で勝てるって気はぜんぜんしてませんもんで、それ以上に監視が必要だなって、実感しています。

小和田哲男先生のプロフィール

2007年2月現在

小和田 哲男　おわだ てつお

戦国時代史研究の第一人者として知られ、主著『後北条氏研究』『近江浅井氏』のほか、『小和田哲男著作集』等の研究書を刊行。専門分野である戦国時代史を通し、不況の時代を生き抜くための要諦や教訓を秘める講演を行い、各地で好評を博している。

◇職歴・経歴

1944年、静岡市生まれ。1972年、早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了。現在、静岡大学教育学部教授、文学博士。

ベストセラーとなった『日本の歴史がわかる本』などの啓蒙書の執筆を行い、ＮＨＫテレビ「その時歴史が動いた」や教育テレビ「日本史」などにも出演し、わかりやすい解説には定評がある。1996年、ＮＨＫ大河ドラマ「秀吉」の時代考証をはじめ、正月時代劇の時代考証も手掛けており、2006年のＮＨＫ大河ドラマ「功名が辻」の時代考証も務める。

◇著書

『山内一豊　―負け組からの立身出世学―』
『武田信玄　―知られざる実像―』
『織田家の人びと』
『戦国合戦事典』
『戦国三姉妹物語』
『呪術と占星の戦国史』
『日本人は歴史から何を学ぶべきか』
『歴史に学ぶ　―乱世の守りと攻め―』
『桶狭間の戦い』
『人望の研究』
『豊臣秀次』
『戦国10大合戦の謎』
『日本の歴史がわかる本』
『戦うリーダーのための決断学』
他多数